映画 遥かな町へ

倉吉ノスタルジー

倉吉市を舞台にした映画『遥かな町へ』が今年秋に封切られる。撮影はほぼ全編にわたって市内で行われ、大勢の住民がエキストラなどで協力。公開前には国内外の主要映画祭への出品が予定されており、現在、完成に向けた編集作業が進む。市民の大きな期待を背負った映画の完成を前に、主演の大谷亮平さんら主要キャストとメガホンを執る錦織良成監督が作品に込めた思いを語った。

（井田慎一）

ミニクリのス 映画『遥かな町へ』

倉吉市を舞台に、漫画家谷口ジローさん（鳥取市出身、故人）が1998年に発表した作品が原作。98（平成10）年から中学時代の63（昭和38）年にタイムスリップした主人公・中原博史が、48歳の視点で14歳の人生を追体験しながら、家族や人生を見つめ直していく。連続テレビ小説『まんぷく』などに出演した大谷亮平さん（45）を主演に、戸田菜穂さん（51）や滝藤賢一さん（49）など実力派俳優が顔をそろえる。監督・脚本は『たたら侍』で「モントリオール世界映画祭最優秀芸術賞」に輝いた島根県出身の錦織良成さん。

映画『遥かな町へ』のキャストら。（右から）大谷さん、及川さん、磯谷さん、戸田菜穂さん、滝藤賢一さん、錦織監督＝2025年８月20日、倉吉市内

主要キャストと監督インタビュー

主人公・中原博史役　大谷亮平さん（45）

漫画の中にいる感覚　幸せな時間過ごせた

―倉吉ロケを振り返って。

原作漫画を読ませてもらい、その作品に描かれている実際の場所で撮影することが楽しみだった。漫画の中にいるような感覚だったり、風景を見ながらの撮影だったり、ものすごく幸せな時間を過ごせた。他のドラマや映画の撮影とはひと味違う感覚で、いち原作ファンとして、その場にいられることや、それが映画になっていくという喜びがあった。

―タイムスリップという特別なシチュエーション。演じる難しさは。

あまり感じなかった。主人公の境遇を想像すれば、父の失踪は気になる。「今の自分なら対応できる」という思いや、それを受けた母の気持ちを考えるなど、非常に理解できる部分が多かった。

僕は今45歳。結婚していれば、中学生や高校生の子どもがいてもおかしくない年齢だ。両親は自分たちを支えるため、生活を犠牲にしていたはずで、両親の年齢に近づくにつれ、どういう気持ちだったのかをよく考えるようになった。博史も、父や母の気持ちを推し量るシーンがある。そこは自分の親を思い浮かべたり、照らし合わせたりしながら演じた。

―錦織監督は作品を通じ「古き良き日本の価値観の大切さ」を伝えたいと言っている。

編集された映像を見て、それはすごく分かった。倉吉ならではののどかさや、自然豊かな場所、（都会と比べ）流れる空気のスピードの違いは、映像を見ただけで感じることができた。

自分がもしタイムスリップしたら、淡い恋心を持っていた同級生との関係をどうするかなど、幼稚っぽく感じるかもしれないが、誰しも想像すると思う。そこをくすぐる作品で、鑑賞中はノスタルジックな気持ちになったり、誰かを思い出したりするなど心地よい時間になる。

倉吉でのロケを振り返りながら、映画の魅力を語る大谷さん

―倉吉の人々の印象は。

地元が舞台の作品が「実写化される」という喜びや、この作品を楽しみにしてくれているというわくわく感をどの現場に行っても覚えた。「待ってくれている人がいるんだ」と、こちらも楽しみになった。

―クランクアップの際、市民に頭を下げて感謝を伝えたのが印象的だった。

（撮影していた古民家の）２階から外を見たら、多くの方がいらっしゃった。撮影の様子を直接見学できないにもかかわらず、暑い中、ずっと外で待っておられた。応援してもらっていると同時に、見学してもらえないことに、温かさと申し訳なさが同時に湧き上がり、最後に一言言いたいと勝手に言葉が出た。あんなことはしたことがなかった。

―作品の見どころは。

倉吉の名所が出てくるなど、ポイントを挙げれば切りがない。ありきたりだが、見どころは「全部」。ナレーションも入れ終わり、完成に近づいている。出来上がった際は絶対に倉吉に行き、皆さんにお会いしたい。皆さんも楽しみに待っていてください。

監督　錦織良成さん（63）

既にあるものを磨くのが本当の発展

―「日本の心を発信する映画を倉吉で撮る」と宣言し、撮影に挑んだ。

日本に連綿と受け継がれてきた家族のつながりの物語。景色や生活様式はもちろん、親が子を思う気持ち、子が親を思う気持ち、おじいちゃんおばあちゃん、友人らみんなと一緒な暮らしなど、倉吉にはその風景が残っている。そこで撮影した作品は、私たちがこれから先どう生きていくのか、世代を越えて考えるきっかけになるはずだ。

―撮影前から何度も倉吉に足を運び、「懐かしい未来」という言葉を訴え続けた。

１人で都会に出て「楽しい」と思えるのは若いときだけ。誰もが必ず誰かに支えられ、平和に暮らせている。互いに信頼し、安心して暮らせることが一番のぜいたくで幸せへの近道。「お互いさま」「支え合い」からなる日本のコミュニティーは、実は最先端だと思う。お金があった方が生活は楽だが、「モノ」だけでは埋められないものがある。壊して新たなモノをつくるのではなく、既にあるものをどう磨くかが本当の発展ではないか。『遥かな町へ』にはそれが詰まっている。

倉吉が舞台となる映画を撮る意義を強調する錦織監督

―100％のキャスティングと自負していた。

漫画の世界観を壊したくなかった。主演の大谷亮平さんや父親役の滝藤賢一さん、母親役の戸田菜穂さんは本当によかった。14歳の博史と智子役にはリアルな中学生を充てるなど、非常に良いキャスティングができた。

オーディションで選ばれた地元の子どもたちも、クラスメート役として自然に芝居をしてくれた。その中にはとても魅力的な逸材もいた。これからも夢を持ち続けてほしい。

―地元の期待は非常に高い。

人と人との関係が近く、ぎすぎすしたところの全くない応援態勢。地元の協力がなければできなかった。これは当たり前のことではなく、本当に感謝している。スイカや梨、シャインマスカットなども差し入れていただいた。

地元が舞台の映画というのは、地元の人たちは冷静には見られないもの。多くの地元エキストラが出演しており、毎回、知り合いを発見している間に次のシーンに移ってしまう。地元の人しか体験できない楽しみ方だ。公開は秋以降。楽しみにしていてほしい。完成後、お会いできることを楽しみにしている。

14歳の博史役　及川桃利さん（15）

倉吉が故郷のような存在に

役作りの苦労や１カ月間過ごした倉吉での思い出を話す及川さん

―「絶対に勝ち取る」との思いでつかんだ役を演じきった。

谷口ジロー先生の作品に、自分のやりたい役で出演できたことは本当にうれしく、誇れること。

14歳と48歳の両方を表情で表現しないといけなかったが、「博史がこういう表情をするのは、相手のこういうセリフがあり、こう感じたから」など、分からないなりにも、毎日原作をしっかり読んで撮影に臨んだ。逆に、14歳を出さないといけないシーンで48歳が出るなど、14歳の素を出す方が難しくなっていた。

―シーンごとに錦織監督と何度も話し込んでいた。

映画への出演は『遥かな町へ』で２作目。まだ経験が浅い自分に「瞬きし過ぎると大きなスクリーンでは目立ってしまう」など、映画の基本的なところから教えてもらった。

―撮影期間中、倉吉のまちに溶け込んでいた。

約１カ月、倉吉のホテルで生活した。撮影が終わってから洗濯をしたり、朝ご飯をコンビニに買いに行ったり。両親が東京生まれ・東京育ちで、両親の実家に行くという経験がない中、倉吉という温かい町が故郷のような存在になった。

―完成を待つ倉吉の人たちへ一言。

家族や友だちとの時間を大切に過ごしてほしいということを、作品を通して伝えたい。倉吉の方にはもちろん、日本や世界の方々にも認めていただける心に残る作品になる。完成披露や舞台あいさつなどで、一刻も早く倉吉に戻りたい。

中学時代の博史のマドンナ　長瀬智子役　磯谷萌々子さん（15）

すてきな町で楽しい時間

撮影やオフなど、倉吉での充実した時間を振り返る磯谷さん

―撮影を振り返って。

演技が難しく悩むこともあったが、博史役の及川くんのセリフを受け「智子だったらこう言っていたんだろう」と意識しながら頑張った。現場の雰囲気がすごく良く、楽しい撮影だった。終わってからも「あの時に戻りたい」と思うほど。

―倉吉の印象は。

１週間程度滞在した。白壁土蔵群は昔ながらの景色が残っていることに感動。漫画そのままの景色は、役を演じる上での安心感につながった。

オフにははなしっこ館にも行き、館内の遊具やクイズにも挑戦するなど楽しい時間を過ごした。北栄町の青山剛昌ふるさと館にも足を延ばすことも。牛骨ラーメンなど東京では味わえないグルメを堪能でき、ずっと暮らしていたいと思えるすてきな町だった。

―倉吉の人々との交流は。

エキストラで出演してくれた地元の中学生と仲良くなり、友達もできた。みんなコミュニケーション力が高く、部活の話題などたくさん話をした。

撮影中も多くの人に声をかけてもらえた。こんなに話しかけてもらえることは初めてで、うれしかった。

―完成を楽しみにしている倉吉の人たちにメッセージを。

笑いあり、感動ありのいろんな感情になれる作品で、私自身、完成を楽しみにしている。さまざまな人が携わっており、絶対におもしろい。多くの人に見てほしい。

本紙が『遥かな町へ』に登場

30人に映画用新聞プレゼント

漫画家の故・谷口ジローさん（鳥取市出身）原作で、昭和30年代の倉吉市が舞台の映画『遥かな町へ』（錦織良成監督）に「日本海新聞」が劇中小道具で登場する。

原作漫画では、主人公で48歳の中原博史が14歳にタイムスリップした「1963（昭和38）年４月７日」、そして博史が現在の自分に意識が戻るも夢見心地の中、列車に乗って東京へ帰る「1998年（平成10）年４月９日」の新聞が描かれている。映画も同様のシーンが撮影された。

新日本海新聞社は、日本海新聞製作センター（鳥取市五反田町）の輪転機で63年４月７日付８㌻、98年４月９日付24㌻の当時と同じ新聞をそれぞれ印刷し、製作側に提供した。（小谷和之）

◇　◇　◇

映画用で再現した1998年（上）と1963年の日本海新聞。映画『遥かな町へ』の劇中小道具として使われた

映画に使用された劇中小道具と同じ新聞（２部セット）を読者30人にプレゼントする。応募多数の場合は抽選。希望者はＱＲコードから申し込む。締め切りは15日。当選者の発表は新聞の発送をもって代える。

申し込みはこちらから

2026年1月1日日本海新聞（12,13面）掲載